

校長会 みえ No. 59

●発行 三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内
TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集 三重県小中学校長会 広報委員会
●印刷 光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり

日常の中の 喜びや輝きを大切に



伊勢市立進修小学校 校長 西山 武

本校は、古来より伊勢神宮「内宮」の鳥居前町として栄えてきた「宇治」の町にあります。地域の人々は、学校に誇りと愛着をもち、学校教育に対して理解が深く協力的です。こうした地域の教育力を土台として、本校では子どもたちの確かな学力、豊かな心、健やかな体を育成することを目指して日々の教育活動の推進に努め、算数科を中心に授業のユニバーサルデザイン化の視点を大切にしながらか授業研究を進め、少人数指導やICT機器を有効活用し「ノートづくり」「振り返り」の研修を進めています。

さて、約2年間のコロナ禍の影響で、昨年度から運動会や文化祭等の学校行事は規模の縮小をしての開催となり、制約を受けながらの活動を余儀なくされてきました。このような状況の中、内容の精選等を行い、運動会は体育発表会に、文



化祭は作品展として開催することとなりました。規模も縮小され従来のような満足感を得られにくいところもありますが、なぜこの活動を行うのか、子どもたちが満足を得られるようにするためにはどうすればいいのかを教職員が考えるちょうどいい機会となりました。また、子どもたちも体育発表会(運動会)で、2年ぶりにオープニングで行うことになった鼓笛(4~6年生)について、なぜ鼓笛を行うのかについて考え意識を高めながら、当日の演奏を行うことができました。

制約された活動の中、子どもたちの満足した姿は大変貴重な宝物と感じる時があります。その貴重な瞬間をとらえ学校通信やHPで発信し、保護者・地域と連携しながら子どもたちを育てていくために、日々努力を続けていきたいと思えます。

今日的課題の 克服に向けて

学びに向かう力の 育成に向けて

川越町立川越北小学校 校長
桂山 幸和



学びに向かう力とは

子どもたちの学力格差の背景の一つに、家庭の教育環境の違いによる影響が指摘されています。様々な背景を持つ、すべての子どもたちの学力・進路保障において、一人ひとりの子どもがあきらめず、学びに向かう力を育成することは最重要課題であると、毎年初めの校内全体研修会で話しています。また、昨年4月、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、二度目の臨時休校期間となりました。その時は、大量のプリント集を配付し、新規の学習内容の課題も出しましたが、子どもたちが家庭で学ぶことは難しく、既習内容の復習が中心となりました。その時、私たちは多くの知識を子どもたちに教えてはきましたが、子ども自らが学ぶ力をどれほど育ててこられたのか、職員と議論したことが思い出されます。

学習指導要領に謳われる学びに向かう力に、このような願いや視点を合わせ、学びに向かう力を子どもたちの生きる力、未来を切り拓く力として捉え、微力ながら学校づくりに取り組んでいます。

子どもにつける力を明確にする

本校の教育目標は、「心豊かでたくましく、自ら進んで学ぶ意欲にあふれた子どもの育成」です。学校づくりビジョンには、その目標実現に向け、いくつかのめざす姿が掲げられていましたが、子どもにつける力を明確にし、職員だけでなく、子どもも保護者も唱えられるものになりたいと考えました。

まず、子どもの姿から子どもにつけさせたい力を出し合い、本校で大切にしている5つの力としました。①自分の考えをもつ力②自分を表現する力③人を大切にする力④挑戦する力⑤心身ともに健康でたくましい力の5つです。

子どもたちの姿から

職員には、常にこの大切にしている5つの力を視点に、日々の授業や行事、指導部の取組について、計画・実践し、振り返り検証していこうと話しています。子どもたちには、授業や行事、学校だよりを通して、大切にしたい力を示し、子ども自らが学びの主体となるよう働きかけています。例えば、日々の授業の中で、子どもたちに自分の考えを持とうとアプロー

チしたり、学期の振り返りで、「自分たちは表現する力がまだまだだな」と子どもたちと振り返ったりしています。また、行事では、運動会において「たくましさとは、最後まであきらめず取り組むことだ」と話し、懸命に取り組む姿が見られる運動会となりました。委員会活動では、保健委員会の委員長が、養護教諭に「最近、休み時間の手洗いがいい加減になってきている気がする。委員会メンバーを集めてほしい」と訴え、子どもたちからの提案でコロナ対策の取組の徹底が始まりました。自分たちの生活から考えをもち、仲間とともに表現する。このような姿をめざしていこうと子どもたちに話しました。

今後の課題

この取組を、PDCA サイクルを重ね組織的に取り組んでいく必要があります。ビジョンについてのアンケートを行うなどしていますが、この5つの力を視点として職員や子どもが振り返る場面が不十分であり、今後の課題と考えます。5つの力と総括の視点をつなげ、子どもにどのような力がついたのか、子どもの姿で振り返ることを大切にしたいと考えます。

今年、「大切にしている5つの力」を合言葉に、学校づくりに取り組んできましたが、今後も心に響く言葉を職員や子どもたちと共有し、この実践を共に進めていきます。

ICTの ベストミックスな活用

名張市立桔梗が丘南小学校 校長
根本 健



新型コロナウイルス感染症が国内で広がり始めて約2年となります。この間、感染防止対策として様々な取組が行われました。学校休校期間の設定や分散登校、リモート学習や動画配信、話し合い活動は控え、給食は黙食、手指消毒・常時換気・マスク着用、調理実習や合唱も控えるようになりました。これまで普通に行われてきた学校教育ができなくなったのです。本校においても、「学びを止めない」ことを念頭に置きながらも、「学校に持ち込ませない」「学校で広がらせない」対策を取りながら、制限のある教育活動を進めてきました。

そんな中、飛躍的に進んだのはICT環境の整備です。国のGIGAスクール構想では、新型コロナウイルスが出現する前の令和元年度から令和5年度までの5か年計画としていましたが、コロナ禍の中、「GIGAスクール」の必要性が高まり、名張市においても、急速に設備が整えられ、令和2年度内には、すべての小中学校で一人一台タブレットが実現しました。まずは、リモート学習ができる環境整備が最優先されたと認識しました。

このことにより、本年度は始業式や終業式、全校集会もリモートという形で行えるようになりました。また、出張の多

くは中止となってしまいましたが、リモートを利用して会議や研修ができるようになりました。校内研修会で講師を招聘する場合であっても、リモートを利用することが多くなり、旅費がかからない分、遠方の方への依頼もしやすくなりました。

授業における ICT 活用については、教職員が活用スキルを身に付けることができるよう教育センターが実施する研修会に参加したり、校内研修会で研修を行ったりしましたが、当初は使い方の研修が中心で、授業でどのように活用するかというのは、個々の教員が工夫をしながら手探り状態で進めていました。一部導入しているデジタル教科書は使いやすく、子ども達にもわかりやすい、話し合い活動ができないのでロイノートで意見を記入してカードを提出させている、低学年は直接入力難しいのでプリントに記入したものを写真に撮って提出させているなど、職員室では活用の方法について情報交換がなされました。緊急事態宣言の中スタートした2学期には、いつ休校になっても対応できるようタブレットの持ち帰りとともに、健康調査を自宅ですることができるよう練習しました。さらに AI ドリルも導入し、益々タブレットの活用が進みました。

タブレットを利用することで、様々なことが便利になります。時間の短縮にもつながります。しかし、便利なことに頼りすぎると、身に付きにくく定着しにくいということを私たちは経験しています。GIGA スクール構想の文部科学大臣のメッセージには、「これまで私たちが取り組んできた教育実践と最先端の ICT のベストミックスを図ることによって、児童・生徒の力を最大限に引き出す。」とあります。便利だから、子どもが興味を持ちやすいからと言って、すべてのことをタブレットに置き換えて学習するのは効果が上がらないばかりか、低下してしまうことも考えられます。紙と鉛筆を使った学習や対面しての話し合い活動など、これまで行ってきたアナログ的な教育実践を大切にしながら、タブレットの効果的な活用方法を研究し、児童生徒の力を最大限に引き出すための「ベストミックス」を模索していく必要があると感じています。

性の多様性に対応する 制服選択制の取組

桑名市立明正中学校 校長

若子 偉之昌



近年、性的マイノリティ (LGBTQ) の人々への社会的関心が高まっているにも関わらず、その理解は十分に進んでいるとは言えません。その割合は、調査によっては 7.6%とされており、生徒の中にも存在するという認識が求められています。また、性的マイノリティの生徒は、「学校へ行きたくな

いと思ったことがある」「自傷行為をしたことがある」と答える割合が高いだけでなく、「自殺念慮」の割合も高く、自分らしさを出せず、生きづらさを感じています。

当然のこととして本校においても性自認にかかわる悩みを持つ生徒が一定数存在すると考えています。それゆえ制服に対する強い抵抗感を持ち、学校生活に支障をきたし、命に関わる看過できない問題となる可能性があることは考えていかなくてはならない課題です。

そこで、本校では「性の多様性」の学習を進めるとともに、制服での困り感をなくそうと、制服選択制に取り組みました。ただ取り組むにあたり、性自認に悩んでいる生徒がいる可能性に配慮し「性の多様性」という観点は表には出さず、現在の制服に関して生徒や保護者、地域の方よりいただいていた意見（女子のスカートは寒い、動きにくい、多様な選択）から話を進めました。

現在の制服は、男女の区別があり、男子は詰め襟服・ズボン、女子はセーラー服・スカートと決められています。制服選択制の内容は、「これまでの制服はそのまま、それに加えて、ドレスコードを示し、市販の物も可とする」というものです。ドレスコードは、男女の区別をなくし「夏服は、上は白のシャツもしくは襟付きポロシャツ。下は紺か黒のズボンまたはスカート。冬服は、上は紺か黒のジャケット、下は紺か黒のズボンまたはスカート」というものです。これにより、生徒は選択の幅が広がり、女子でもズボンを、男子でもスカートをはけるようになります。取組については、教職員間での意思統一、PTA 役員への説明、生徒会執行部への説明と同時に、生徒会でも積極的に校則改正に取り組むよう依頼しました。（2学期に、生徒会で靴下の自由化を実現しました）

令和5年度からブレザー型共通制服の導入に取り組み始めた桑名郡市校長会とも折り合いを付け、他の学校に先んじて制服選択制に取り組ませていただきました。生徒、保護者には2度の提案を行い、そのたびに意見・質問をいただき、丁寧に回答を行いました。特に、保護者からは、制服と市販の物が混じると統一性が失われるのではないかと、生徒からはファッションに走るのではないかとといった意見などをいただきましたが、丁寧に説明をすることで理解を得られたと思っています。その後、販売業者にも説明をし、校内に見本を展示し、令和3年9月1日から実施しました。10月には、来年度以降入学して来る小学校5・6年生とその保護者にも文書を出し、理解していただくよう協力を求めました。

令和5年度から桑名郡市ではブレザー型の共通制服が導入される予定ですが、導入されるまでの期間、一人でも性自認で悩んでいる生徒が制服選択制で救われたらと思います。

※今回の取組は、前任の校長が引いてくれた路線をそのまま引き継いだものであります。

◆全日中静岡大会報告◆



全日中静岡大会 (全体会)初の オンライン開催

紀北町立三船中学校 校長

上ノ坊 淳



全日中静岡大会 第2分科会に 参加して

鈴鹿市立白鳥中学校 校長

上田 章善

10月、全日中静岡大会が東陸中静岡大会を兼ねて行われました。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、当初の「現地参加型」から「ハイブリッド型」となり、最終的には全て「オンライン形式」での開催となりました。

1日目は、開会式に続いて、文部科学省から、「働き方改革」「GIGAスクール構想」「令和の日本型学校教育」など8項目の説明が行われ、コロナ禍をはじめ、急激な変化と予測不可能な将来に対して、学校の果たす役割の重要性と校長の重責を強く感じさせるものでした。

全体協議会では、第1提案で全日中総務部長より、「次世代の学校教育の実現」として、学校・家庭・地域を「未来を創る力を育てる場」とした「10の提言」の提案がなされました。第2提案では、宮城県気仙沼市の校長先生から「震災の教訓を伝える防災学習」として、地域や大学などと連携した取組や「中学生による語り部」など、伝承する活動の様子や震災後の取組が紹介されました。NHKの朝ドラマの視聴者であった自分は、「当時の状況が登場人物の心境と重なる」と言われたことが印象的でした。

2日目は、中学生の迫力溢れる吹奏楽の演奏から始まり、続く全体会では、「未来創造！共に歩みだそう ふじのくから」のローガンのもと、7つの決議案が採択されました。記念講演は、脳科学者の池谷裕二さんによる「学習、成長—未来の脳を考える」と題した講演でした。学習のメカニズムややる気を引き出す動機づけなど、生徒・保護者・教職員などに向けた話にも活用できる内容でした。講演直後には、チャットで多くの参加者から感銘を受けた様子の書き込みが寄せられていました。

校長室からの参加となり、静岡を訪れ、全国の校長先生方と膝を交え協議・親交を深めるとともに、鰻、餃子、美味なお魚を食べることは叶いませんでしたが、大会の意義を実感するとともに、成功に向けご尽力いただいた静岡県校長会を始めとした関係者に感謝の気持ちでいっぱいです。

『「主体的・対話的で深い学び」の実現』を研究題とした第2分科会に参加しました。

2本の研究発表が行われましたが、1本目は、滋賀県彦根市立南中学校の発表でした。南中学校では、「読み解く力」の向上を目指し校内研究を推進しています。加えて、南中には、若手を中心とした自主的なOJTグループ（NYK：南中をよくする会）があり、学習会や研修、意見交換会や講座等が実施されているとのことでした。

グループ協議においては、OJTの推進について話題になり、必要性は感じているものの「OJTを推進するための時間をどのように生み出していけばよいか」等の悩みも共有されました。

2本目は、大阪府豊中市立第十五中学校の発表でした。第十五中学校では、「授業改善と生活指導は一体」という認識に立ち、授業力向上プロジェクトを進めています。授業力向上プロジェクトの取組としては、①生徒が考える場面を積極的に設定すること。②「あたたかな聴き方・やさしい話し方」をどの教科、どの授業でも指導すること。③授業展開を「本日の流れ・問いの提示（見通しを持つ）→一人学び→ペアワーク→全体交流→まとめ」に統一することなどが実際の例を示して紹介されました。

グループ協議においては、授業改善と生活指導は一体的に行われるべきであるという認識に、多くの校長先生から賛同の意見が出されました。

大会初のオンライン開催ということで、音声の途切れやパワーポイント画面の共有ができない等のトラブルもありましたが、早々に対応いただくなど、開催に携わる校長先生方の熱意を感じた大会でした。

特別委員会アンケートから見えてきたもの

県小中学校長会特別委員会 アンケート結果考察報告



四日市市立保々中学校
校長

諸岡 克博



四日市市立浜田小学校
校長

小林 一也

7月末に行いました特別委員会アンケートに対しては、校長先生方にご協力いただきありがとうございました。特に、理事の方々には、各地域で統一した回答が必要な問いに対して、市町教育委員会にご確認いただいたり、各校長先生へご指示いただいたりしたことに、感謝申し上げます。

さて、今回「働き方改革」と「一人一台端末・ICT環境整備」の2本立てでアンケート調査をさせていただきました。どちらも課題が多く、学校を預かる校長としては、自校職員の健康維持・管理や、児童・生徒の学力保障に向けたICT活用の取組は日々迫られた大きな課題です。今回のアンケート結果のまとめが少しでも校長先生方の学校経営に寄与できたらと思い、以下のように結果考察の概要を報告させていただきます。詳しくは、三重県小中学校長会ホームページをご覧ください。

「働き方改革」については、時間外勤務時数削減の取組は各地域、各校でいろいろ取り組まれており、少しずつ削減される傾向にはありますが、校務削減等についてはある程度限界にきており、どの地域においても教職員の増員を求める声が強いです。また、「720時間を超えている教職員がいる学校」の問いでは、小中の違いが顕著でした。やはり、中学

校においては部活動に係る負担が解決されていないと、勤務時間削減は難しいと考えられます。削減に向けた取組事例も参考にいただき、各校での今後の取組に活かしていただければと思います。

「一人一台端末・ICT環境整備」については、①学校における環境整備、②家庭の負担とその支援、③行政・教育委員会の支援、④教育内容の4つの観点で見いただければと思います。①については、市町によって貸与されたタブレットや付属品、導入されているソフト、ICT支援員等の配置状況が違うことにより、児童・生徒が学ぶことに差異が出るとするならば、教育の機会均等の精神に反することになります。また、②についても、タブレットの家庭への持ち帰りやオンラインでのやり取りが進む中、家庭環境による差異が生じています。そうならないように各市町の校長会と教育委員会とで協議の場を持ち、善処していく必要があると感じました。③については、①②での学校の環境整備、家庭支援に加え、教育委員会によるICTに関する教育現場等への支援も必要との声がありました。これらについては、今回の結果を参考に各市町の状況を踏まえ、各市町教育委員会と協議を重ね、市町教育委員会からも県・国へ要望を出していく材料にいただければと思います。④については、コロナ禍のため前倒しで取組をスタートせざるを得なかった中、各地域、各学校で本当によく努力・工夫をいただいている状況が伺われました。他市町の取組を参考にいただき、各地域や各学校での今後の取組推進に活かしていただければと思います。

これらアンケート結果・考察をもとに、三重県教育委員会と以下の点につき懇談する場を持ちました。

1. 働き方改革については、今年度の勤務状況に対する認識の意見交換、特に中学校部活動の今後の在り方について話し合いました。
2. 一人一台端末・ICT環境整備については、教育の機会均等を念頭に、学校における環境整備、家庭の負担とその支援、行政・教育委員会の支援、教育内容の4つの観点で意見交換を行いました。

いずれの場合も、三重県教育委員会と三重県小中学校長会が同じ問題意識を持ち、その解決に向け検討していることが確認できました。

本部役員だより



教育の転換期において

三重県小中学校長会 中学部会長
中川 克巳

コロナ渦で生活や行動の在り方の変化、経済活動の悪化の影響を受け、「子どもの貧困」「ヤングケアラー」「不登校の増加」等、子どもを取り巻く問題も深刻化しています。困難を抱える子どもたちを誰一人取り残すことなく未来を切り拓く力を育むには、子どもの生活を保障しつつ、社会と繋がる多様な経験や変化への対応力、課題発見・解決力の育成等、全ての子どもの可能性を引き出す「令和の日本型学校教育」への転換が急務です。

その一つである GIGA スクール構想では、子どもの興味・関心、学習理解度に応じた「個別最適な学び」が進められる反面、家庭の経済状況や市町の財政状況により ICT 端末性能

や通信費負担等に格差が生じていることが特別委員会のアンケート結果から明らかになりました。私たち校長会は、義務教育の公平性を確保するためにも教育格差の是正に向けた取組が進められるよう教育行政に働きかける必要があります。

こうした教育の転換期では、学校に期待される役割は大きく、「未来の創造」につながる教育を推進するためにも、教員不足問題の解消も含め「働き方改革」の実効性を高め、新たな時代を切り拓く教育の専門家としての力量と総合的な人間力を備えた教員を育成することが不可欠です。

これから導入される段階的定年延長についても年齢構成や管理職候補者の養成等、学校経営に係る課題が解決できる制度設計となるように三重県小中学校長会は三重県教育委員会に要望してきました。今後も国や県等の様々な教育施策について、情報を収集し議論する中で、様々な課題の解消に向け、教育関係諸機関と連携を図りながら制度の改善・充実のための取組を進めていきます。

会員の皆様には、この1年間新型コロナウイルス対応で苦慮する中でも三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

県小学校長研究大会報告

初めての Zoom研究大会 を終えて

亀山市立野登小学校 校長
中西 佐智子



『研究大会中止・誌上発表』の昨年の反省から、研究大会をどんな形で開催するか模索してきました。学校では本年度から本格的に一人一台の端末が配備され、様々な活用が進められています。そこで、オンラインによる研究大会開催に向け準備を進め、何度もテストをしながら当日を迎えました。初めての試みで、不安もありましたが、大会は大成功。

課題もありますが、参集のための移動時間は不要。講演会では講師の顔がはっきり見えました。分科会では発言機会は多少減りましたが、全員での話し合いにより地域による違いや多様な取組を聞くことができました。どんな状況でも工夫次第で実現可能だということを改めて感じました。今後は、準備段階等でリモートのメリットも取り入れながら、来年こそは、全員が一堂に会した研究大会が開催できることを願っています。

県中学校長研究大会報告

初オンライン 開催

伊賀市立緑ヶ丘中学校 校長
松田 誠



8月24日(火)、三重県の中学校長が一堂に会して、「三重県中学校長研究大会」を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン形式での開催となりました。当日、コロナ対策等で緊急に臨時校長会を実施しなければならない市町もありましたが、午後は、全体会から8つのブレイクアウトルーム(8分科会)へ入室し、各分科会の研究題と視点に沿った提案を受けて日頃の実践や意見交換をすることができました。

初めてのオンライン開催でしたが、大会後の「研究大会の反省」の結果、開催時期や開催方法、全体会と分科会について高評価をいただきました。今大会が、参加していただいた校長先生方にとりまして何らかのお役に立つものとなりますことを願っております。

最後になりましたが、ご来賓の皆様や大会実施にご尽力いただいた関係者の皆様方に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

随 想



コロナ禍こそその やりがい

津市立立成小学校 校長
黒川 一秀

本校の校区は、江戸時代から昭和にかけて続いた「瓦づくり」と、校歌で「梨の花咲く…」と歌い継がれる「梨づくり」で知られています。昨年から本校（24学級、児童数596名）でもマスク生活や黙食など様々な制限が続いています。そのような中でも子どもたちは生き生きと学校生活を送っています。授業に集中したり、休み時間友達と遊んだり、給食の時間黙食したり、あるいは行事で活躍したりする様子を「1授業日2件」を目安にYouTubeにアップロードし、学校ホームページの「学校生活の様子」に掲載し保護者にお届けしています。

授業参観がコロナ以前のようにはできない中、この学校公開の取組については、「子どもたちの様子がよくわかる」「楽しみにしているのでこれからも続けて」等のご好評もいただいています。学校ホームページへの掲載を写真から動画（YouTube）中心にしたり、学校だよりに各学年の動画のQRコードを掲載したり、学校だよりで学年・学校行事の様子を特集したりと新たな試みをするたび、アクセス数や視聴回数がどんどん増えて、手ごたえも感じています。

結果としての手ごたえ以上にやりがいを感じているのは、校内の巡視から公開までの一連の取組です。子どもたちの活躍など良い場面を求めて校内を回る毎日には、その学級や個々の子どもの長所など新たな発見がたくさんあります。それらを保護者が視聴されることを念頭に撮影、編集、公開する過程はとても楽しいものです。

個人情報を示す場面をカットしたり、名前にぼかしをかけたり、一定期間を過ぎた動画の閲覧を止めたりする作業も、探求心をもってやっているうちに要領よくできるようになったと思います。

コロナ禍でお子さんの学校生活に不安をお持ちの保護者がとても多く、学校公開のニーズが非常に高い今だからこそ、公開に伴うリスク管理をしつつ、校長自ら積極的に子どもたちの姿を発信することを楽しみたいと思っています。



「つながり」に 感謝

紀宝町立矢淵中学校 校長
竹原 巧

この2年間、コロナ禍でさまざまな教育活動が「中止」「延期」「縮小」を余儀なくされていますが、今年度は私にとってその一つひとつの取組には「最後の」という冠が付き、様々な場面でこれまでの教師生活を振り返る機会が与えられています。38年間、一喜一憂しながらも頑張ってきたのは、出会った人々との「つながり」であると断言できます。

私の初任校は、東紀州にある当時全校生徒1000人を超える大規模校で、生徒指導上の課題も多い学校でした。

大学を出たばかりの青二才がクラス担任を担い、子どもたちからは「先生」と呼ばれてはいましたが、実際のところは、先輩方からの叱咤激励、同年代の仲間からの助言や支援をうけながら一人前の教師に育てていただきました。その後も「生徒指導上の課題がある学校」での勤務が続きましたが、いずれの学校においても仲間との協力・協働体制で山積する課題を乗り越えることができたと感じています。

多くの子どもたちとの「つながり」から様々な言葉を得て自らの教育実践を振り返りながら成長することができたと感じています。いろんな関わりがありましたが、中でも家庭環境が不安定であった子どもから「初めて私を人として扱ってくれてありがとう」と卒業時に伝えられたことが今も自らの宝として心に残っています。自己満足かも知れませんが、教師という職業の素晴らしさを実感するとともに、より一層「一人一人を大切にする教育」を目指す原点ともなりました。

管理職になり、保護者・地域の方々からも様々な意見や要望、お叱りをいただくこともありました。子どもたちを大切に思う気持ちは誰しも同じであり、視点の違いをどう修正するかが常に課題でしたが、それまでの地道な「つながり」を通してしっかりと話しあい、個々の想いを理解しあうことで解決に導けたケースは数知れません。

近年、「個」を重んじる傾向が強くなってきていますが、これまでの「つながり」に感謝するとともに、これからも「つながり」を大切にしながら、残りの人生を学校や地域の教育活動に関わっていきたいと思っています。

鳥羽市小学校長会

自由に物が言える風通しのよさ

鳥羽市は、三重県東端部の志摩半島北側に位置し、4つの有人離島や太平洋に面した南鳥羽地区など、特色ある豊かな自然に囲まれた国際観光都市です。市全体の児童数は約660人。他市の大規模校では1校の児童数と同じくらいの人数だと思いますが、市内には、7つの小学校があります。他地区とは違い、離島の中に学校があることも大きな特徴の一つです。

今年度は「鳥羽市の教育が大きく舵を切る年」と位置づけ、教育ビジョンが新しくなりました。目指すところは「多様な社会を生き抜く、知性・感性・理性にあふれた健康な市民の育成」です。鳥羽市中学校長会や教育委員会とも連携しながら、目標達成に向けて教育活動に取り組んでいます。

月に一度の定例校長会は小中学校合同で実施しています。教育委員会からの所管事項の説明などの後、小中合同で情報交換をします。その後小学校と中学校の部会に分かれての話し合いとなります。会議の時間短縮のため午前中の開催が基本ですが、議題によっては時間が足りなくなることも多々あり、午後も開催したり、オンラインで開催したりと、様々な工夫を試みています。鳥羽市は学校裁量に任される部分が多く、それだけ判断に迷い悩むことが多い中、各学校の具体的な実践例が大いに参考になっています。また、誰かに相談すれば、必ず応えてもらえます。鳥羽市の小学校長会は、困ったときに頼りになるメンバーの集まりです。



編集後記

新型コロナウイルス感染防止対策を行いながらも、運動会・修学旅行などの学校行事が進められているところです。まだまだ様々な制限のある中ですが、子どもたちが行事に取り組む姿は、私たち教職員にも元気を与えてくれています。

今年度は、「TOKYO 2020」の行われたオリンピック・パラリンピックイヤーでした。選手たちの姿に勇気もらい、挑戦する大切さや人との関わりの中で、成長できるすばらしさを感じさせられました。残念ながら今、子どもたちは、挑戦することや人との関わりに制限がある中で生活をしています。この状況もまだ続きそうではありますが、「子どもたちのために何ができるのか」の視点に立った教育活動を充実さ

度会郡中学校長会

子どもも大人もみんな幸せになる学校づくり

度会郡中学校長会は、玉城町、大紀町、南伊勢町、度会町の中学校6校の校長で組織されています。市町村合併や少子化の影響で、現在生徒数は6校で967人。子どもたちをとりまく状況は、年々多様化し、難しい対応が求められています。しかし、豊かな自然と素朴であたたかい地域に支えられ、子どもたちは心豊かにたくましく成長してくれています。それは、やはり6人の校長がリーダーシップを発揮し、それぞれの地域の特徴を活かしながら、特色ある学校経営を行っているからだと自負しています。そして、そのベースとなるものが、いわゆる『度会教育』。校長会が掲げる教育理念なのです。

「現下の社会情勢を深く洞察し、義務教育の重要性を認識して、人間尊重の精神を基盤とした人間性豊かな児童・生徒の育成」。(『度会教育』理念)

この理念を受けて、各校では、「自ら考え、学ぶ生徒の育成～これからの教師の役割を考える」(玉城中)、「やる気と見通しをもって学び合う活動」(大宮中)、「個に応じた学習指導の工夫」(大紀中)、「主体的・協働的に学び合う学習活動」(南勢中)、「自分の思いを伝え、互いのよさや違いを認め合う活動」(南島中)、「自尊感情を高める教育活動」(度会中)などの研究が進められています。

これらは、コロナ禍にもかかわらず、レジリエンスを身につけた生徒の育成に向けて学びを止めない校長たちの「こだわり」に他なりません。6人の校長たちは、いつも967人のことを考えています。

最終目標は「子どもも大人もみんな幸せになる学校づくり」です。そのための発信を度会郡中学校長会がしっかりリードしていきたいと思っています。



せるため、校長同士の横のつながりもさらに深め、臨機応変な対応で乗りきっていきましょう。

このような中、第59号の発行にあたり、原稿執筆を快くお引き受けいただいた皆様方には、心より感謝申し上げます。

年2回の発行となりましたが、広報「校長会みえ」は、これからも、今後の情勢、教育の動向を踏まえて情報提供に努め、会員相互の情報交流や校長会組織の充実、発展に役立つよう取り組んでいきます。

ご協力ありがとうございました。